
閻魔大王のカウントダウン

みどり風香

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

閻魔大王のカウントダウン

【Zコード】

Z2467V

【作者名】

みどり風香

【あらすじ】

「君は、あと三日で死ぬ」突然現れた閻魔大王は、ヒュースケンにそう言った

注意：柵越え、史実ネタ、腐向け、死ネタなどの要素が入っています。

「君は、三日後に死ぬ」

突然僕の目の前に訪れた奇妙な男性は、そんなことを言った。

「ハリスさん、ちょっと出かけてきますね」

僕は上司にそう断つて玉泉寺を出る。その上司ハリスさんはどうと、机に何冊もノートを広げてそれとにらめっこしていく、僕の声は届いてなさそうだった。インパクトばかり求めて暴走することが多くて苦労させられ続けるけど、あんなふうに真剣な顔をされると苦労も忘れる。……真剣に考えていることがいかに変でも。

日本に来てからだいぶ経つ。まだ価値観や習慣の違いに戸惑うことはあるけど、それでも長く居ついたぶんだけ慣れた。ハリスさんの奇行にも慣れた。今ではあの人とずっと一緒にいたいと思うようにさえなってしまっている。

願わくば、日米修好通商条約が締結されなければよかつたのに、なんて。不謹慎なのは分かつていいけれど、考えずにはいられない。そうなれば、それだけあの人とここにずっとといられるから。いつの間にか、僕はとんでもなく欲張りになつたらしい。

吹いた風が肌を刺す。もうこんなに寒くなつたんだ。今夜は暖かいものでも作ろうか。ハリスさんは何が好きかな。前、お邪魔したお宅のお弟子さんからいろいろと日本の料理を教えてもらつた。その中から、今ぴつたりそうな料理を探す。やっぱりお鍋にしよう。材料はその人たちからいっぱいもらつたから大丈夫。あ、あのお二人、誘おうかな。みんなで囲うから鍋はいいんだって言つていたし。そう考へると、自然とあの人たちの仮住まいを足が目指していく。なんとなく、気持ちがはやる。

いつの間にか、目の前の人があつた。気づかなかつたのかな。周囲

にはその人以外誰もいない。この空間に、僕とその人だけが残つて切り取られたような気がした。

その人は、変な人だつた。日本人の着物ではないけれど、それに近い服を着て、頭には大きな帽子をかぶつている。その帽子には「大王」としつかり書かれていた。……何なんだ、この人？

僕をじつと見つめるその目は動かない。眞面目そうな目つきでにらまれてはいるけれど、別に脅威を感じるわけではない。むしろ、親しみさえ覚える。

「あの……」

「君は」

その人は、僕の言葉をさえぎつて、ただ一言、言った。

「君は、三日後に死ぬ」

と。

時間が、止まつた気がした。日本語はだいたい分かるから、彼が何を言つたのかは一応分かる。

えつと、僕？ 死ぬ？ 三日経つたら？ うん。理解した。

でも、その言葉に込められた意味を頭が理解するまで、時間が必要だつた。

「死ぬって、僕ですか？」

間抜けな声で、目の前のおかしな人に聞いてみた。

「そう」

「三日後に？」

「うん」

「死因は？」

「それはいえない

「それは間違いじゃなく？ 冗談じゃなく？」

「真面目に。本当。君はあと三日で命が尽きる」

声色はいたつて本気だ。実はどうきりでしたーといつ空氣でもなさそうだ。たぶん、この人の言つてることに、嘘は少しも入つていないのでだろう。

死神なのだろうか。それとも悪魔なのだろうか。僕に近づく死を宣告したその人は、死神らしくない、かといって悪魔らしくもない。だつて、死神とか悪魔だったら、そんなつらそうな顔をしないもの。

「そうですか」

ため息ひとつでその宣告を、僕は受けとつた。

「落ち着いてるね」

「ええ」

あと二日で死ぬと言われた割に、僕は驚かなかつた。むしろ、これほどまでに落ち着き払つていた自分に驚いた。

お世話になつた師弟さん一人を誘い、僕は玉泉寺に戻つた。お弟子さん 曽良さんが手伝つてくれた鍋は、ハリスさんに好評だつた。

「だいぶ料理がうまくなつたな、ヒュースケン君」

「それはよかつたです」

「また作つてくれたまえ。今年の冬は寒すぎて凍死しそうだからね」僕はそれを苦笑で答えた。はつきりと頷くことはできない。来年どころか、今年の冬だつて越せるほど命が長くないのだから。

「ヒュースケンさん?」

「……あ」

曾良さんが心配そうにこいつちを見上げている。……といつかこの体勢はなんだろう。いつの間にか、曾良さんが僕に擦り寄つてきて、猫みたいにじやれてくる。

「あの、曾良さん？ 猫のまねですか？」

「そんなところです。猫は意外と飼い主を気にするのです」

「僕は貴方の飼い主ですか……」

曾良さんなりの遊びへの誘いかな。付き合つてあげようとして、お師匠さんの芭蕉さんが割つて入つた。

「いりあ曾良くん！ ヒュースケン君に失礼でしょ！」

「……ちつ

「あ、ちょっと何舌打ちしてんの！！ もう帰るんだよ！」

「空氣読まないふざけたジジイですね」

「ひじい！ もう帰るんだよ！ 長居しちゃ」迷惑でしょ…」

「いえ、よかつたら、泊まつても大丈夫ですよ？ ハリスさんもにぎやかになるつて喜びますから」

悪いねえ、と芭蕉さんは言つて曾良さんを僕から引つペがした。

その後、盛大に舌打ちされ断罪を受けた。

仕事が少し残つていたので、三人が先に床につき、僕一人は小さな灯りを頼りに書面とにらめっこしていた。残業にも慣れている。あの人の尻拭いを考えれば、仕事が多くなるのはいつものことだった。

ふと、また空間が切り離されたような感覚が、体中を覆つた。僕はペンを走らせていた手を止める。机から目を離して、伸びついでに後ろへ体をひねると、先ほどのおかしな人がきちんと正座していた。

「また、あなたですか」

僕はその人に向き直る。室内では、さすがに帽子を取つていた。その帽子は彼の横にちゃんと置かれている。

「なにか、ご用ですか？」

「特に、用つてわけじゃないけど」

「お仕事にさしつかえちゃいますよ」

「いや、まあ、うん……」

仕事という単語に、彼は気まずそうに僕から目をそらす。本当にさしつかえるようだ。それも相当。

「そういえば、貴方の名前を聞きませんでしたね」

「うん。オレは、閻魔大王」

「えんま……？」

確かに、死者を裁く王と聞いたことがある。死者の生前の行いから、死後天国へ行くか地獄へ行くかを決定する冥府の王。

改めてその人を見直す。年は、僕よりは上だろうけど、まだ若い。顔立ちだって、整つてはいるけど恐怖心を持たせるようなものじゃない。正直、僕のイメージしていた冥府の王とはずいぶんかけ離れているような。

「とてもそんな人には見えませんがね」「よく言われるんだよね」

はは、と閻魔大王は笑う。冥府の王も笑うのか。

「昼間、僕に死刑宣告してましたが、あれは仕事の一環ですか」

「いや、アレはオレの自分勝手」

「自分勝手で人に寿命を教えちゃつていいんですか」

「とってもよくない。バレたら秘書から串刺し刑をもらっちゃう」「ならどうして、教えたりしたなんですか？ あんなこと聞かされたって、誰も喜びませんよ。僕一人だけそうなりませんでしたけど。ていうかびっくりしましたけど」

「ん……」

彼はうつむいていいにくそうに目を泳がせる。

「どうしてなんだろうね。ただなんとなく？ 君に伝えなきやつて、思つたから」

彼のあの行動は、何かしらの確かな理由があつたわけじゃないらしい。本能とか心の奥底とかそういう目に見えないものが突き動かしたんだろう。

「三日後に死ぬ、って言つてましたけど、それは本当なんですね？」

「本当。オレ、人の寿命が分かるから」

「で、死因は？」

「言えない」

「なぜ僕は三日後に死ぬんですか？」

「それも言えない。言っちゃいけない決まりなの」

「いつ死ぬかは言つてもいいと？」

「うーん、グレーゾーンかな？ 誰にでも言つてるわけじゃないよ。オレだつて忙しいんだから」

その忙しさの合間に縫つて僕に会いに来ててくれて、なおかつ死亡宣告を受け取つたというとんでもなく破格の待遇を受けたことは、本来喜ぶべきことなんだろうがそんな気持ちは少しもわいてこない。それが自然な感情なんだろうな。

「では、もうひとつお聞きしますね」

僕は一言あいた。

「なんでそんな泣きそなんですか」

閻魔大王は、膝の上に震えた握り拳をおいて、唇をきゅっと結んで僕から目を離さない。その目だって、今にも大泣きしそうだった。「閻魔大王という方が、そんな顔したら、示しがつかないでしょう？」

僕は閻魔大王の手をとつて、そつと開かせる。手のひらから、じわじわと血がにじんでくる。ああ、これ、相当強く握ったな。ハンカチをその手に巻く。これで完璧だとは微塵も思つていなければ、何もしれないよりはいいだろう。

「秘書さんに、ちゃんとした手当てをしてもらつてください。僕は閻魔大王への正しい手当てなんて分かりませんから」

「うん」

人間にこうして触れられても何もしない。むしろ触れてくれたことを嬉しがっているふしも見当たる。

「どうか、本当に閻魔大王なのか？」一介の人間に世話をされるなんて、これじゃあ駄目な上司を部下が世話を焼きしているみたいじやないか。

「寝ないの？」

そんなことを聞いてきた。この人の言動は、いつも突然すぎてついでいるかどうか不安だ。

「これが終わったら」

僕は机の上の書面を指差した。

机に向かいなおしてわずかに残った仕事をすぐに片付けた。

くるつと向き直ると、姿勢正しく正座している閻魔大王がこちらを見ていた。……まさか、僕の仕事が終わるのを待ってたんじゃないだろうか。アレだけの熱視線で睨まれていたのに、僕は不思議と感じなかつた。いや、感じたことは感じていたが、アレは子供を見守る父親のソレだ。なんだか、懐かしい。日本に来てからは、ハリスさんが時々僕に向けてくれていた気がする。

「僕、もう寝るんで」

「うん」

床までついてきた。ほんとにこの人は何がしたいんだ？

「秘書さんに、刺されないといいですね」

「うん」

僕はそれだけ言って目を閉じた。額に、冷え切った手が置かれた。氷よりも冷たいその手は、なぜか寒気を感じさせなかつた。慈しみの手だ、これは。

僕の死は、あと二日。

その日、僕は午前中にやるべきことを片付けて、午後は暇を持て余すことにした。今日の朝一番に、相手の気持ちも考えずに会いたいと電話してしまつた僕は、やけに積極的過ぎると後になつて自分に失望した。あと二日で、やり残したことをできるだけ終わらせたかつた。仕事を根性で終わらせた自分には、一応賞賛を「えておこう。

玄関から、人の声がした。僕は急いでその人を迎える。

黒船に乗つてやつてきた提督の部下、海軍軍人コンティー大尉。嬉しそうな微笑は、僕の心を突き刺して行く。

「ヘンリー、来たよ」

「いらっしゃい。どうぞ、あがつてください」

ハリスさんは、大尉の上官ペリー提督とどこかへ出かけた。そうさせたのは、ほかでもない僕だ。入払いにここまで回りくどいことさせる僕は、変なんだろう。

僕はお茶と菓子を差し出す。

「しかし、驚いたな。ここ数年ずっと音信不通だったのに、いきなり電話してくるなんて。君、手紙の返事も出さなかつたくらい僕を拒絶していたのに」

「そうですね。ちょっと……思つところがあつて」

「ふうん?」

大尉は机に頬杖ついて首をかしげる。向かい合いの状態だからなのか、彼の視線が痛いくらいに実感できる。

「……ヘンリー?」

「はい?」

「何かあつたのか? 僕に会いたいと言つくらいだから」

「まあ、あつたといえばありましたが、取るに足らないことですよ」

「そう。……その割には浮かない顔だな」

「大尉がそう思われるのならそうなんでしょうね」

大尉は手を伸ばして、僕の前髪に触れ、かき上げた。

「前髪で目を隠されていても、僕には分かるんだよ」

「そのようですね」

不思議と、僕はその手を拒まなかつた。前髪が目を隠していたことがあって、「目、悪くなるよ?」と会うたび会うたびかき上げられまくつていたのが嫌で嫌で仕方がなかつた僕は今の髪型に落ち着いていてこれでもうかき上げる必要もあるまいと一人勝ち誇つていたかつての僕が懐かしい。

「大尉は、結婚なさらないんですか?」

「なんだい數から棒に」

「気になつただけですよ。大尉はルックスいいですし、性格は……猫をかぶれば及第点ですし、地位も金もありますし、引く手数多だと思つのですが」

「君、僕を褒めている振りしてけなしているだろ？ 分かるよ？」
大尉は、まだ僕の前髪をいじつている。

「といふかねえ、君、僕の気持ちを分かつていてる上でそう聞いているのかい？」

「だつたらどう切り返します？」

……違う。本当は、こんな意地悪言いたくて呼んだわけじゃないのに。その逆なのに。

「そうだねえ……僕には目の前にいる人に生涯の愛を誓つた身ですから、とでも返しこうか

大尉はそいつで微笑んだ。ああ、この笑顔は反則だ。余計僕が意固地になるじゃないか。

する、と大尉の手が僕の頬へ降りて撫でる。

「今、教えようか？」

頬から顎へ降りて、持ち上げる。この先何をされるかなんて容易に想像がつく。こんなストレートな求愛行動、会つてから幾度となく受けてきた。そしてソレに對して、僕は彼の口を手でふさいでガードしてきた。

だけど、僕はソレをしなかつた。あと一日で死ぬならこの人の自由にさせてもいいだろうと半ば投げやりだった。でも僕が大尉に色々い応えをしたわけじゃない。つまり、体だけの関係と同じ。一夜よい夢を見せてやるのと同じ。……それがどれほど、彼にとつて傷つくことなのか、分かつてはいるけれど。

どうぞお好きに。どうせ僕はあなたと結ばれない。そうなつたとしても、あなたとは一日後に永遠のお別れだ。ざまあみる。

「……」

彼は目前で動きを止め、離れた。

「大尉？」

「ヘンリー、見ぐびらないでもらおつかな」

彼は真剣な面持ちで、僕を睨んだ。

「君が僕を思つていないことなどとくに分かつてゐる。君から愛をもらえないのに、表面上の愛だけもつたつて惨めなだけだ。いつもの君なら、先手を打つて阻止しようとするとするだろう」

この人は、本質を正確に見抜いた。

「ええ、そのとおりですよ」

違う。僕は、この人を傷つけるために来てもらつたんじゃない。一言だけ。ただ一言、お礼を言いたくて呼んだはずなのに。

別の言葉、まったく逆の言葉をすらすら紡いでしまう。

「どうせ、僕とあなたは結ばれない。身分も違う、役目も違う。何もかも違う。僕はあなたが嫌いです。それ以上になんとも思つていません。人生の中ではほんの少し知り合つた程度にしか認識していません。これから再び会つこともないだろうから、この際一度だけいいからあんたの好きにしてやつてもいいかと思つただけです。袁れですね」

そう、憐れだ。僕が。

大尉の上に乗つかつて、胸倉を掴んだ。

「いいんですよ、好きにしたつて？ ハリスさんはどうせ提督と話しここんで遅くなるまで帰つてしません。ここには僕とあんた二人だけ。誰にも邪魔されない、道具はすべてきっちりそろつてゐる、こんな最高の環境またとありませんよ？ セットと好きにしたらどうですか？」

違う違う違う。違うのです。本当に言いたいことは、こんな、あなたにとつて残酷極まりない言葉なんかじやない。

「抵抗しません。望むならなんだつてやつてやりますよ？ 一夜限り、いい夢見させてやりますよ？」

「ヘンリー」

彼は僕の肩に手を置く。

そうじゃない。本当は、違う。何で、止まらないんだ。

「好きにすればいいでしょう？」どうせ、僕らはあなたの望む未来にたどり着かないんだから！」

それ以上、何も言えなくなつた。

彼は、強引に僕をかき抱いた。その力は、強い。僕の言葉をとぎらせるほど。

「君が言いたいのは、そうじゃないだろう？」耳元でそう囁いた。本当にこの人は本質を見抜くのがうまいな。僕限定だけだ。

「君は、むやみに人を傷つける言葉を出せるほど、意地悪な子じゃないよ。僕に対してさえ、心をえぐるようなことはしない。君は、僕が心配するくらい優しい子だよ」

諭すように、僕に言ひ。本当に反則だ。泣きたくなるのをじらえるのに必死だつた。

「……すみません。取り乱して」

「いいよ」

「本当は、お礼がしたかったんです。あなたの気持ちには応えられないけど、それでもあなたが僕にくれたものはすばらしいものだから。あなたが僕の今を形作っているひとつだから。ごめんなさい。ごめんなさい」

「いいよ」

「大尉、本当に、ありがとうございます。でも、もう僕のことは忘れてください。あなたには応えられません。もし、本当に好きになつても、すぐに永遠のお別れしなくちゃいけなくなるんです。僕のことはただの記憶に変えて、別の人を愛してください。幸せになつて。あなたの隣に、僕じゃなくて別の素敵なお人がいることを祈ります。どうか、幸せになつて。それだけです」

「……本当にどうしたというんだ？　いつもの君なら、かわいらしい皮肉をとめどなく吐き出すのに」

「何ですか、それ」

僕は苦笑した。そつと、微々たる力ではあるけど、抱き返す。それに気づいたのか、大尉はまた力を込めて抱き返す。

気づかなかつた。もっと早くに気づくべきだつたな。この人、とても暖かい。この人の胸は、安心する。いまさらもう遅いけど。この日、ハリスさんは提督の泊まつている宿で一晩世話になるそだ。夕食前に、そう電話をもらつた。本当に、この日は二入きりだつた。

大尉と食事して、のんびりして、月がきれいだといわれて、適当に返して、そうして僕にとつての貴重な一日は消費されていく。大尉と一緒にいる時間が、楽しいと分かつていてなら、あんなにかたくなに拒むことはなかつただろう。今さら遅いけど。

就寝だつて、彼は同じ布団で寝ようと誘つただけで、寄り添つて寝るだけで、それ以上のことはしなかつた。

「いい夢を、ヘンリー」

「そちらこそ」

彼は優しく僕を胸に抱き寄せる。この優しさは、僕に向けられるべきではない。どうせ僕は死ぬ。分かっていながら拒まないのは、僕が甘えていたいからなんだろう。

ふと、枕元に、閻魔大王が正座していたのに気づいた。

「……あ、大王だ」

「うん。……邪魔しちゃつた？」

「いいえ。大丈夫です。あ、でも彼を起こさないようにお願いします。とつてもいい寝顔なので。きっといい夢を見てるんだと思います」

「オレもそう思つ」

彼は力なく笑つてゐる。また、あの冷たい手を僕の額によこした。

「血が通つてないみたいですね。冷たさが異常ですよ」

「そりや閻魔大王だからね。人間とは体のつくりがちょっと違つんだよ」

「ああ、確かに。」

「……君は、あと一日だけ生きられる」

「明日まる一日?」

「うん」

「次の日には、死ぬんですか?」

「うん」

その与えられた時間は、ハリスさんのために全部使い切ろうと決めた。これは、閻魔大王に宣告されたときから決めていたことだ。

「ごめんね」

「なぜあなたが謝るんですか?」

「オレには、これしかできない。君の寿命を延ばして上げられない。」

君は、君の思う人と一緒に幸せを感じていてるべき人なのに」「仕方ないですよ。そういうものだから」

閻魔大王は、僕にごめんと残して、消えた。本当に何しに来たんだろう。秘書さんに射されてなければいいけど。もう少しで死ぬ僕が閻魔大王というとてつもない存在の人をなだめている。おかしな関係だ。僕は大尉の胸に顔をうずめて、睡魔に従った。

僕の死は、あと一日。

その日の僕は、いつもよりずっと早くに起きた。朝食を用意して、ハリスさんを起こして、仕事を音速で終わらせて、ずっとハリスさんと寄り添っていた。

ハリスさんが喉渴いたといえば、すかさずお茶を出し、疲れたといえба肩をもむ。ハリスさんのむちゃなインパクトにも、ハリスさんが不審に思わない程度に付き合つた。

やれることはやるだけやつた。つもりでも、ひとつやり遂げるともつと何かしてさしあげたいという欲望がわいてくる。大切なものは、失つて初めて気づくというけれど、それを思い知った気がした。僕の命が尽きると分かつて、ハリスさんと一緒にいるこの時間がどれだけ大切な物か、痛いほどに思い知つた。

でも遅いのだ。いまさら大切がつたって、明日には死なんだから。

夕食は、ハリスさんの好きなものだけ作った。いつも、健康に響くからと、ハリスさんは悪いけど健康的なものばかり作っていた。でも、今日くらいはハリスさんの好きなものをしてあげたかった。もう、この人のために料理することはできないのだから。

「おお、私の好きなものばかりじゃないか！　君もようやく私の希望に応えるようになったか」

「なんですかそれ。今日だけですよ。いつもこんななんじや、体壊しますから」

「ちえー」

食後、のんびりしていたハリスさんに、僕はたぶんどんでもない爆弾発言をしたんだと思う。真剣な表情で、頬み込んだ。

「ハリスさん」

「どうしたんだい、ヒュースケン君？　急に改まつて」

「お願ひがあるんです。ソレを聞いてくれたら、もうわがまま言いません。巨泉にも乘ります。これから行うであろう交渉で歯も引っこ抜きますし、がんばりもします。ですからお願ひを聞いてください

い

「ん、言つて、いらん」

「い、一緒に、寝てくれませんか？」

ハリスさんは、はとが豆鉄砲食らつたような顔をしていた。十秒くらいして、ハリスさんは意を汲み取つたらしく、僕の肩に手を置いた。

「ヒュースケン君、私はね、そういう事情とはまったく無縁でいることを誓つたのだが……」

「いえ、そういう意味の寝るではなく、添い寝して欲しいって意味なんですが……」

「あ、そうだったの？　いいよいよ。まったく君は今日に限つて甘えんぼさんだな」

うわあ、あつさり承諾してくれた。しかも僕が今日に限つてハリスさんに親切なことに何の疑念も抱いていない。それはそれで都合

いいけど。

床に入ると、ハリスさんがそつと抱き寄せてくれた。昨夜は大尉にそうしてもらっていたけど、次の日には別の男と床を共にするつて、僕って嫌なやつだな。

「それより、どうしたというんだい？ 今日はやけに私に寛大じゃないか。いつもならあんなに私を甘やかしはしないのに」

さすが僕の上司といいたい。僕の奇行（？）に気づいていた。

「なんとなくですよ」

「そうかい。おやすみ」

「おやすみなさい」

でもそれ以上追及してこなかつた。

「ハリスさん」

「ん？」

「起きてました？」

「そんなすぐに寝られないよ」

「すみません、もうひとつわがまま言わせてください」

「うん。いいよ。今日は君が甘やかしてくれたからね」

「キスしてください。どこにするかはお任せします」

ハリスさんはやれやれというだけで、嫌がりもため息もなかつた。

「君、ずいぶん甘えたになつたなあ」

ハリスさんは僕の前髪をかき上げる。この行為、大尉じゃなければ僕だって嫌がりはしない。

ちゅつと、額に優しいキスが降りる。

「君の期待に添えたかどうかは任せるよ

「いえ、これで満足です」

閻魔大王は、枕元に座つていなかつた。それが寂しかつたのは否めないけど、あの人だつて忙しいんだからと自分に言い聞かせた。

ハリスさんの寝息を耳にしながら、僕も眠りにつく。

僕は、明日には、死ぬ。

その日は確実にやつてきた。その日、僕はちょっとした仕事で外出していた。ひと段落して、外で空気でも吸つてこようとした宿舎を出る。

また、空間が切り離されたような感覚。これは、僕とあの人人がつながる時の感覚。

目の前に、泣くのをこらえる閻魔大王が立っている。

「もうすぐですね」

「うん」

「僕、死んだら天国へいけるでしょうか」

「今は、言えない」

「そうですね。どうせ、分かることですものね」

閻魔大王は僕に近付く。この人はどうして泣くのを抑えるんだろう。泣いても誰も気づかないのに。僕一人だけ驚くけど。ていうか慰めるけど。

「ごめんね。君は、もう、もうすぐ死ぬ」

「はい。でもいいんです。やれるだけのことはやりました。この先どんな死に様でも、たぶん気にしません。……痛いのは嫌ですけど、ちゃんと笑えているだろうか。ちゃんと、閻魔大王をなだめていられるだろうか。

いきなり、閻魔大王は僕を抱き寄せた。この三日間で、僕は三人に抱きしめられている。これ、喜んでいいのか？

「な、なんですかいきなり」

「泣いていいよ」

それだけ、彼の言葉はそれだけだ。

いつの間にか、僕は泣くのを彼以上にこらえていたらしい。一番素直になれるハリスさんの前でだつて泣かなかつたのに、この人にすがりついて、僕はわんわん泣いた。

周囲に人がいることなんて考えていなかつた。たぶん、人払いはしてあつたんだろう。あの感覚がするときはいつも、僕と彼以外の気配がなかつたから。

「もつと、生きたかった……死にたくなんて、ないに、決まってるじゃない、ですか……」

「うん」

「でも、どうしようもないなら、しょうがないって、言い聞かせて……それで我慢して……どうにかしようって、抗う、気持ちも、なぐつて……僕は、どうしようないです……」

「うん」

「いまさら、遅いのに……」

「うん」

「じめんなさい。泣き止むの、遅いです……」

「いいよ」

人目もばからず（人という人もいないのだけど）、子供のように大泣きしたのは、ずいぶん久しぶりだ。それを、出会って三日くらいの人にすがり付いて泣くのだから、僕はよく分からない。

全部吐き出したら、本当の本当に悟った。気がする。

あの人胸から離れて、またあとでと笑顔で手を振る僕は変なのだろうか。

帰路についていると、目の前に、二人の武士らしき人が立ちはだかつた。腰に下げた武器で、迷うことなく僕を斬りつける。さしたる抵抗もせず、僕はあっさりと、その場に倒れた。遠のく意識の中、僕は何を思ったんだろう。

-ハリスさんに、会いたいなあ。

どうせその願いは叶わない。僕はこの世のものは思えない激痛と、止まらない吐血に苦しみながら、空に手を伸ばす。この手を、最後に握ってくれたのは、誰なんだろう。

閻魔大王かな、ハリスさんかな、大尉かな。できれば、ハリスさんがいいな。

「ハ、リスト……」

僕の死へのカウントダウンは、終わった。僕は、もうこの世のも

のではなくつた。

願わくば、僕の死があの人の重荷にならないようだ。

(後書き)

長ーー！ 長いよー！ 思つた以上に長くなっちゃったよ。
今回ま、「ヒュースケン君が自分の死期を知つたらどうなるか」と
いつ妄想から生れ落ちた產物です。史実ネタって言つてもかなりお
かしなことになっていますが、それはもう流してやってください。
ここまで読んでいただき、ありがとうございます！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2467v/>

閻魔大王のカウントダウン

2011年8月1日03時10分発行